

地域の発達相談事業における 「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム第3版」を活用した家族支援 —保護者による自由記述を含めたアンケート結果の分析—

佐藤昌子¹ 木村あやの² 若松有里¹ 松永しのぶ²
(1.子育てステーション世田谷発達相談室) (2.昭和女子大学)

Research Question

学齢期の発達相談では、家庭内の問題行動として「宿題にとりかからない」等の学習関連の話題になることが多く、背景にLD等の可能性が見え隠れする。WISC等の結果の丁寧な説明を受けていても、「やればできるのにやらない」と焦る保護者や、学校に支援や配慮を求めることをためらう保護者は少なくない。著者らは、保護者が発達障害児等の困難を体験的に理解し、他の保護者とともに支援を具体的に考える機会が必要と考え、2016年から保護者を対象に「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム第3版」(一般社団法人日本LD学会・一般財団法人特別支援教育士資格認定協会,2016)(以下、「体験プログラム」と記す)を活用した実践を行い、保護者が子どもの学びにくさに気づき、学習関連の問題行動に対する見方を修正することにもつながったことを報告した(佐藤ら,2017)。

保坂・保坂(2014)は教員を対象に体験プログラムを実施し、自由記述を含めた評価アンケートの分析を行い、体験プログラムが子どもの困難や気持ち等の理解や指導・支援方法に関して肯定的な変化をもたらしたことを報告しているが、保護者対象の実践例は少なく、検討もあまりなされていない。

目的 保護者を対象に体験プログラムを実施した実践を報告し、保護者の体験プログラムの受け止めを自由記述も含めて分析し、学齢期の発達障害児等の家族支援における有用性を検討することを目的とした。

子育てステーション世田谷発達相談室とは

世田谷区の発達障害者支援事業の一つであり、世田谷区から委託を受けた社会福祉法人共生会SHOWAが昭和女子大学内に開室し、個別相談とペアレント・トレーニングの二つを柱に無料で発達相談を行っている。

Method

参加者 子育てステーション世田谷発達相談室(以下、当相談室と記す)のペアレント・トレーニングの受講者のうち希望する9名の保護者であった。参加者の子どもは、小学校4年生から未就学までの9名の児童であった。

実施時期 2023年11月。

実施概要 『学びにくい子どもの理解と支援』と題し、120分で、体験プログラムの「読む」「書く」のワーク1~7と、読み書きの支援方法等の情報提供を行った。

保護者に実施するにあたっての配慮 体験プログラムの心理的負荷について事前に書面で説明した。また、体験プログラム中は、参加者は「学び方が異なる子ども」、実施者は「責任感のあまり厳しいことを言ってしまう先生」等の役割の札を着用し、ロールプレイであり参加者自身の失敗ではないという認識を共有しやすくした。



fig.1 役割の札

実施者 当相談室のスタッフ2名と心理学を専門とする大学教員1名。実施者は公認心理師、臨床心理士、特別支援教育士、臨床発達心理士等であり、実施者の1名は体験プログラムの講師認定講習会を受講済みである。心理学を学ぶ学生ボランティア1名が運営を補佐した。

調査内容 プログラムおよび情報提供に関する11項目の質問(「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」の5件法)と、自由記述欄から構成されるアンケートを実施した¹⁾。アンケートは体験プログラム実施時に配布し、参加者がその場で記入したものを終了時に回収した。

分析方法 5件法による質問項目は、項目ごとに集計した。自由記述は計量テキスト分析システムKHCoderを用い、表記ゆれや同義語等を調整した上で共起ネットワークを作成し、階層的クラスタ分析(Ward法)を行なった。

Result1

質問項目の分析 11項目のうちプログラムを受けての気持ちや考えに関する6項目について報告する。

- ・体験プログラムの説明のわかりやすさ… 肯定的評価* 9名中9名
- ・体験プログラムは子育てに役立つ …… 肯定的評価* 9名中9名
- ・子どもの困難や気持ちが理解できるようになった … 肯定的評価* 9名中9名
- ・子どものかかわり方や対応について考えられるようになった … 肯定的評価* 9名中9名
- ・見通しや自信がもてるようになった … 9名中7名が肯定的評価* 他は「どちらともいえない」
- ・他の人にも受講を勧めたい …… 肯定的評価* 9名中9名
勧めたい対象(複数回答) …… 学校の先生(9名中8名)、家族(9名中7名)、他は保護者仲間等(肯定的評価*: 5件法の選択肢の中で「とてもそう思う」または「そう思う」を指す)

Result2

自由記述の分析 自由記述で得られた文章をKHCordeerを用いて分析した結果について報告する。

KHCordeerによる抽出語は「子ども」18回と最も出現回数が多く、次いで「親」9回、「感じる」「読み書き」8回、「困難」「ツール」「先生」が6回と続いた。共起ネットワークは5グループに分類され、各グループの抽出語から「子どもの困難と支援への理解」「子どもの学習意欲への懸念」「子どもへの共感的理解」「学校の先生への期待」「体験的なプログラムへの肯定的評価」と解釈できた。

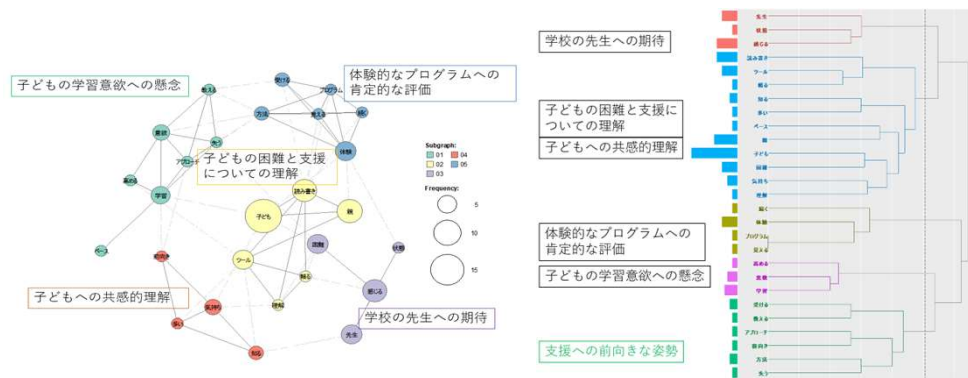


fig.2 共起ネットワーク

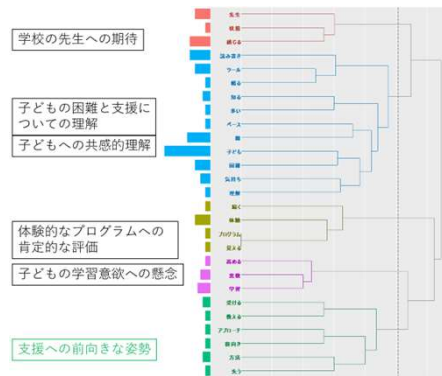


fig.3 階層クラスタ分析

計量テキスト分析システムKHCoderとは

- ・テキストデータを分析するためのソフトウェア。主に日本語の文章を対象とし、単語の頻度や共起関係を調べることができる。たとえば、アンケート結果や文書を分析し、よく使われる言葉や関連するトピックを可視化することができる。自由記述のデータから新たな発見や傾向を見つけるのに役立つツールである。

Discussion

体験プログラムは、**保護者にとってわかりやすく、気持ちや考えの変化を促す**ことが示された。保坂・保坂(2014)による教員を対象とした結果と比較すると、教員の「体験による子ども理解」や「研修機会」は、保護者にも認められた。その一方で、保護者の「子どもの学習意欲への懸念」と「学校の先生への期待」は、教員の結果では報告されていない。保護者らは、読み書きの困難が意欲低下につながる体験を重く受け止め、学校との協力体制の必要性を強く実感したと考えられる。体験プログラムへの参加が、**保護者に子どもの困難の理解を促す**とともに、**保護者が学校での支援や配慮を求めることを後押しする機会となる**ことが期待できる結果と言える。

今後はより多くの保護者に向け、「読む」「書く」以外のワークも含めて体験プログラムを実施するなど、実践内容を広げて検討を進めたい。

1) 倫理的配慮: アンケートには回答は任意で匿名性が保証されることを明記し、書面にて研究発表等への利用の同意を得た。利益相反関係はない。

Reference

保坂 保坂(2014): LD等の発達障害の理解のための疑似体験ワークショップにおける「新版LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」の検討—参加者による自由記述を含めた評価アンケート結果の分析—。LD研究, 23(2), 187-198.

一般社団法人日本LD学会・一般財団法人特別支援教育士資格認定協会(2016): LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム

佐藤昌子・鎌田せりあ・百瀬良・樋口寿美・田中奈緒子(2017): 地域の発達相談事業における「読み・書き」困難への家族支援—「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム第3版」の活用—。日本LD学会第26回大会Web論文集,616-617